

耳原総合病院 第22回地域医療連携をすすめる会

耳原の1年間の実績と 新たな取り組みをアピール

9月15日に「第22回地域医療連携をすすめる会」を開催しました。本会は外部の医療機関の皆さんに集まっていたいで、当院との医療連携を深める場として年に1度開催しています。今回は41医療機関から42人が参加しました。

はじめに、奥村病院長が、がん診療拠点病院、地域医療支援病院としての1年間の取り組みの報告とともに、在宅

緩和ケアパスについて、実際にパスを使用した方の症例を交えて、報告しました。続いて、外山消化器外科部長は、新たに開設した胆石外来の特徴について話しました。胆石症の治療は病態によ

って内科的治療、外科的治療など様々な選択肢があり、胆石症外来では内科学科の連携を強め、病態に合った最適な治療を提供できることを伝えました。



外山和隆
消化器外科部長



藤本卓司
救急総合診療科部長



坂本能基
産婦人科部長



藤井健一
小児科部長

藤本救急総合診療科部長からは、総合内科外来が主に対象とする疾患の紹介。病歴聴取と身体診察を大切にし、紹介された患者さんへの身体診察を行う中で、診断を確定した症例を紹介しました。坂本産婦人科部長は、産婦人科医師の増員、当院の分娩



みみはらホールに集った42人の医療機関の参加者

第2回 耳原総合病院 がん患者・家族サロン ラ・パンジイ

入退室自由
お気軽にどうぞ♪

2018
12/1 (土)
13:30~16:00
※開場13:00~

会場
耳原総合病院
2階
みみはらホールA

事前予約不要
参加費無料

企画

13:30~14:30

「だるまの由来・歴史についてのお話」

講師：天理大学 准教授 丸山 泰明 先生
(現天理大学文学部歴史文化学科考古学・民俗学専攻准教授)

14:30~15:30

物づくりの時間「だるまの色付け」

あなただけの“だるま”を作りませんか？

お問い合わせ

耳原総合病院 サポートセンター／がん支援センター担当者まで
TEL 072-241-0501 (代表)

【定期開催もしています！ がん患者・家族サロン ラ・パンジイ】

耳原総合病院は、2017年4月に大阪府の「がん診療拠点病院」の指定を受け、地域に根差した“がん医療”や“ケアの質の向上”を目指しています。

毎週火曜日14~15時に開催している、がんサロン「ラ・パンジイ」では、専門職のミニ講座を設け、がん患者さんやその家族が交流しながら、これからの生活の一助となれるような場所を提供しています。

パス(クリティカルパス) II治療や検査の標準的な経過をスケジュール表のようにつまこめたもの

講演会終了後は懇親会を行います。これからの具体的な連携のあり方についての相談など、より密接な地域医療連携の発展が、展望できる会となりました。

藤井小児科部長から、一般夜間診療を中止し、小児科医の当直を開始して小児救急の受け入れや、紹介診療に力を入れてきたこと。重症心身障害児の入院受け入れ(スマイルケア入院)では、多くの患儿を受け入れてきた実績について話しました。

件数の増加について報告。新病院になり、アメニティーの充実をはかりながらも分娩費用は抑え、差額室料がないこと。超緊急帝王切開術のシミュレーションを行い、必要な時には30分以内に娩出できる体制を整えたことを述べました。

シリーズ 現場からの 視点

その41



絵馬の寄せ書き

沖縄県知事選挙最終盤にかけて台風24号の石垣宮古島・沖縄本島上陸の予報が報じられ、選挙への影響を懸念する声も聞こえるなか、9月27日から支援に入った。同人会グループでは、この選挙期間中に職員や友の会会員などで構成する「医療介護まちづくりの会」から32人、延べ1000日を超える支援を行い、玉城デニー支持を訴えた。

玉城デニー知事誕生の熱気を体感 沖縄県知事選挙の最終盤支援

沖縄の現状を知り、基地問題解決に連帯の運動を

域に対するアイデンティティーが、これほどまでに強いのかというところである。政党、世代などあらゆる立場をのりこえて結束できるアイデンティティーが、沖縄にはあるというところを実感した。

もう一つは、アイデンティティーがあるが故の感情、本土に対する壁である。ハンドマイクで支援活動を行っていた時のこと、玉城デニー陣営を支援している選挙カーから、初老の男性が声をかけてきた。「どこから来たの？」という問いに、「大阪や福岡」と応えたが、返ってきたのは「あまり本土の人が派手に動き回らないでほしい」というものだった。沖縄の人は本土の人が宣伝などとすると、怖がって一歩引いてしまつたというのだ。

これについて、同行していた沖縄市在住の民医連職員に、率直な意見を聞いてみた。その方は、今回選挙支援自体初参加という方だったが、「若い世代にはそんな感情は少ない、むしろもっと沖縄を知ってほしいと思ってる」とのことだった。本土と沖縄、世代によってさまざまな感情があり、これは沖縄の人が乗り越えなければいけない壁であろう。

一方で我々も、そのような現状を理解して、沖縄に寄り添うことが必要だと思つた。沖縄の基地問題は、この選挙で解決したわけではない。今後長い闘いとなるだろう。今回の支援活動を通して、支援に行った仲間が沖縄のことを学び、共に闘った現地の方々との連帯を深めてくれたら、基地問題を解決する大きな力になると信じている。

(本部 植田 恒平)